わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ

113

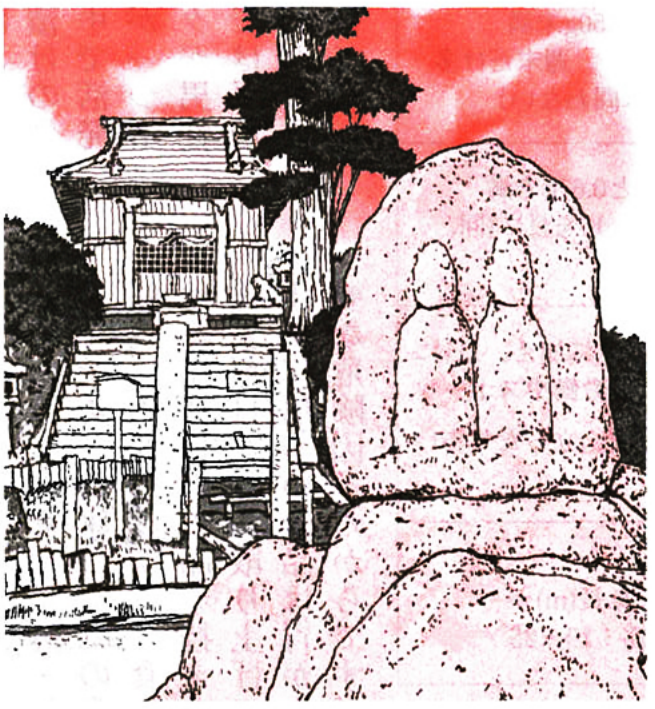
医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

天災と日本

昨年の東日本大震災の体験から、改めて日本が地震大国だということを思い知らされた。同じ思いを抱く人は大勢いることだろう。1000年に一度の大地震といわれるゆえんは、869年（貞観11年）に起こった貞観地震を念頭に置いている。平安時代に現在の青森、岩手、福島、宮城に相当する「陸奥国」を襲った巨大地震は、今回と同じく大津波を引き起こし、多数の命を奪っていった。

改めて9世紀後半の主な天災をみていくと、貞観地震の前後には、富士山や阿蘇山、鳥海山などが相次いで噴火し、地震や津波もところどころで発生していることがわかる。歴史は繰り返すというが、まさに地震と津波はほとんど途切れることなく日本列島を揺さぶり続けてきたのである。

私が住む熱海や伊豆半島全域も実に地震の多い地域として知られている。近いところでは、昭和5年に起こった北伊豆地震がとりわけ甚大な被害を及ぼした。300名近くの命を奪い、1000人以上が負傷、5000戸以上の家屋が崩れている。マグニチュード7のこの大地震の後には伊豆半島各地でいくつかの断層が発見されたが、そのひとつである「丹那断層」は熱海市に隣接する函南（かんなみ）町の丹那盆地に存在する。丹那断層は35kmの長さにおよび、この地震によって上下に2・4m、北へ2・7m移動した。今は公園になっている断層を訪れると、大きくずれた水路の石組みがそのまま残っていたり、造りで、ひそやかなたたずまいが心を安らげてくれる。しかし、ここにも北伊豆地震の無残な爪あとが残っている。地震によって壊れて原型をとどめていない鳥居と石段は、本来あるべき位置から1mほどずれており、神社全体のバランスに歪みを生じさせているのがはっきりとわかるのだ。人影も車の往来もほとんどない静かさのせいか、悲惨な地震が襲ったとはにわかに信じ難い風情を漂わせている一方で、小さな神社が、過去に起こった不幸な出来事を忘れないでと訴えているかのようである。丹那断層も火雷神社も、当時は貴重な地震研究の資料として各国から研究者が大勢やってきたらしい。



ずれた地層を見ることができる地下観察室があったりする。

さらに車を走らせると、のどかな田園地帯から山へと続くそのふもとに「火雷神社」がある。「からい」と読む。本殿は思いのほかこじんまりとしたしかし今では、どちらにも訪れる人はそれほど多くなく、歴史の中に埋もれてしまった感さえある。

火雷神社の近くには伊豆地方ではほとんど見られない「双体道祖神」が、これまた物静かに鎮座している。高さ60cm、幅46cmほどの大きさで1711年に建立されたとある。道祖神は、いわば村を守る路傍の神であり、双体は男女のカップルを意味する。平安時代から日本に登場した最も身近な神、それが直下型大地震の傷跡が残る村にあることもまた、不幸に見舞われた人々の心根を表しているようである。

丹那盆地からは盆地を形作る小さな山々と富士山を仰ぎ見ることができる。過去に何度も大爆発を起こした富士山は、雄大さと美しさを兼ね備え、天災とともに生きる私たちを励まし見守ってくれているようでもある。

イラスト・伊藤栄章